



一・旅／動き続けて見える世界

劇場公演の旅

中込健太（二五歳）の二〇一〇年は旅の連続だった。二月三月に欧州七カ国、五月六月に関西から北海道へ、七月は坂東玉三郎氏演出の「打男 DADAN」で新潟から九州へ、九月に関東、一〇月一一月に欧州六カ国、一二月には新潟から大阪や仙台を経て東京まで年間合計八七公演の舞台に立った。佐渡で開催する国際芸術祭「アース・セレブレーション」へ出演した八月を含めても、佐渡で過ごす期間は年々短くなるばかりだ。中込は、研修所を卒業してメンバーとなり、中心的なポジションに立ちつつ、舞台の下準備やトラックの助手席での道案内役もする若手メンバーだ。

「連日の公演と長距離移動で体力的に辛い時もありますし、公演が数日空けば、休養にはなりません。今度はずムが崩れます。最初の頃はコンディションの波が大きいのが課題でした。今は朝起きて寝るまでの、準備運動のやり方や太鼓の調整の細かいことに至るまで、自分の手順や流れを大切にしています。一日のサイクルを一定にすることで、自分の体の微妙な変化や、太鼓の響きの違いに敏感になるんです。多くの旅を経験するうちに感覚が磨かれて、皆がどんな風にこの音を感じているのか、鼓重の感覚も少しずつ共有できるようになったような気がします」

鼓童は旅する集団だ。国内外の劇場を回る「ワン・アース・ツアー」を軸に、小中学校や高校を回る「交流学校公演」、舞台メンバーのソロ活動やワークショップまで、出演者を入れ替えながら幅広い活動が続ける。年によって異なるが、国内、海外、本拠地の佐渡でそれぞれ一年の三分の一ずつを過ごすのが大まかなスケジュールだ。これまで三〇年間で四六カ国、延べ約三千四百回を超える

※この章に登場する鼓童メンバーの年齢は二〇一〇年当時。

劇場に到着。まずは太鼓を搬入する。

